



episode 25 待ちに待った至福のとき

投稿者 吉井 祐一郎 さま(福岡県)



『ペンギんたいそう』
齋藤 慎 作
福音館書店 2016年

クリスマス前夜、黄色の表紙に目を引かれ、私が初めて娘に買った絵本が『ペンギんたいそう』だった。会社からの帰りにふと立ち寄った本屋で、サンタさんに負けじとお小遣いから奮発してプレゼントを用意した。もちろん、私には娘の喜ぶ顔が浮かんでいた。

翌朝、1歳の娘は、クリスマススリーの下に置いていた絵本には目もくれず、サンタさんからの大きなおもちゃの箱に夢中だった。私は、ただただ悔しかった。

毎晩できるだけ、『ペンギんたいそう』を娘に読もうとするのだが、娘はお気に入りのアンパンマンの絵本を読んでほしいみたいで、手にもって振り回していた。妻にも『ペンギんたいそう』の魅力はあまり伝わっておらず、私だけがペンギん親子と体操をしていた。

就寝前の体操が日課になっていたある日、娘が『ペンギんたいそう』を振り回して、声にならない声でアピールしていた。妻に何事かと聞くと、保育所の絵本の読み聞かせで『ペンギんたいそう』が初登場したと。その日から娘と一緒に、いきをすって～、はいて～が出来、一緒にじゃんぶも出来た。待ちに待った至福の時。ただ飽きるのも早く、回数はどんどん減っていった。

その娘も4歳になり、『ペンギんたいそう』は1歳の妹のお気に入りになった。絵本の最後、「おしりをふって～ またあした」を姉妹と合わせて私もお尻を振り、一日の疲れとさよならする。毎回、「知り合いには見られたくないな、お尻だけに」と、絶望的に不毛な後付けを頭の中でし、いつまでも振っていたいなと切に願う。

「絵本の日アワード in FUKUOKA 2023」投稿作品より



本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本のある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



『ぺんぎんたいそう』があつてよかった

世界中で感染が爆発した新型コロナウイルスが日本でも蔓延し、自粛生活を余儀なくされた2020年から2022年にかけて、ビブリオキッズでもっとも活躍した絵本は、『ぺんぎんたいそう』です。「絵本があつてよかった」「『ぺんぎんたいそう』があつてよかった」と幾度、感謝したでしょう。

「いきをすって～」「はいて～」に始まる本書が、大人と子どもの自律神経を整える処方薬になると考え、何百組の親子と、何千回、何万回と読みあったことでしょう。お腹の底から息を吸い込み、吐き出す行為を繰り返すと、その場は笑顔に包まれるのです。

2013年に、月刊絵本「こどものとも0.1.2」10月号として刊行の後、2016年に単行本化されると、ペンギンをマスコットキャラクターとするビブリオキッズで本書はフル活用され、あつという間で人気者になりました。2020年以降、また別の形で必要とされる絵本となったのです。

はじまりは、墨一色のペンギン

『ぺんぎんたいそう』の原点が誕生したのは、作者の齋藤 槇氏が美大生のときでした。動物の絵を1枚に仕上げるという課題が出て、上野動物園に通い、完成したのが墨一色の写実的なペンギンだったのです。

止まっているペンギンに張り付き、たまに動く様子を写真に撮って、それをぱらぱら見たときにアイデアが閃きます。課題の一枚絵を、絵本の形に私家製本したのです。作者はこれを『初代ぺんぎんたいそう』と命名しています。

齋藤氏の具有は、美術の技能ばかりではありませんでした。友人のお母さまが福音館書店の「ちいさながくのともし」の編集者と知り合いだったと分かります。その編集者を齋藤氏の展示会に案内してくれたことで、運命の扉が開きます。展示していた貼り絵の象を褒めてもらっただけでなく、この象が主役の『ながー

いはなでなにをするの?』でデビューに至りました。

絵に動きをつけるために取った選択とは

デビューの次には売り込みです。墨一色で描いた『初代ぺんぎんたいそう』を編集者に見せ、「赤ちゃん絵本として色付きで作り直したらどうでしょうか」と提案します。こうして私家版絵本は大変身して、福音館書店から発行されたのでした。

齋藤氏の絵画技法は、デビュー作にみられるとおり、独自に編み出した貼り絵の手法でした。しかし、貼り絵の場合は美しく止まった感じを表現するとして、動きのある『ぺんぎんたいそう』は自らの技法から離れ、手描きを選択したのです。

『初代ぺんぎんたいそう』を赤ちゃん絵本にリメイクするときに意識したのは、「踊れる絵本」でした。目指した方向性に対し、それに合う表現技法を選んだというわけです。

発想の転換が次の作品につながった

『ぺんぎんたいそう』がまさにコロナ禍を生きる親子の支えとなっていた2021年4月、支えとなるもう一冊の絵本が加わりました。続編が出版されたのです。

そもそも続編は二番煎じになると感じ、作るつもりがなかった齋藤氏でしたが、あるとき考え方が変わります。「たいそうシリーズ」が何冊かそろって、ひとつの大きな作品という捉え方も面白いと思うようになるのです。創作活動を続けているから生まれた発想の転換でしょう。

そして、またも生きものを取材し、観察を重ねて生まれたシリーズ第2作は、『かめかめたいそう』です。「こどものとも0.1.2」で発表されてから4年、単行本の出版が待ち遠しい今日この頃です。

文献

- 1) 福音館書店編集部：絵本を作る人 (17) 齋藤槇さん『ぺんぎんたいそう』, 母の友 (784), pp.48-50, 2018.
- 2) HugKum編集部：待ちました!『ぺんぎんたいそう』の次は『かめかめたいそう』, HugKum HP <https://hugkum.sho.jp/> 2021/4/17